畝水▼壇の浦｜田中訴水▼（鶴絃会）思い川｜大場暁星▼虞美人草｜竹原輝祥▼武蔵野｜石川輝晃▼由井正雪｜桧木輝苑▼川中島｜大石鶴伶▼小敦盛㈡｜染谷鶴泉▼忠度｜青島鶴瑛▼小敦盛初前｜三上鶴浄▼同初後｜伊藤鶴麿▼花の白虎隊｜柿沢篁峰▼噫小野訓導｜小野鶴彦▼（来賓）茨木｜志水旭城▼薩摩義士｜水谷浩水。

京都琵琶協会六月例会

六月八日(日)昼一時本部平井会長宅。会員数氏研修演奏のあと恒例の祇園八坂神社奉納演奏会の打合せや納涼懇親会開催の件などを協議して小宴、七時散会。（出席者）平井春嶺、水内燈水、桜井旭冨、荒木旭媛、牧南水、山岡旭清、安住旭康、矢吹旭美津、梅原旭濤、楊嶽水、林旭蔚、馬場鴨水並びに故伊吹正陽氏夫人。

琵琶演奏大会

六月八日(日)正午静岡市駿府町県婦人会館、主催静岡県琵琶協会。月下の陣｜海野▼桶狭間｜松永▼会津の稚児桜｜松浦秋翠▼吟詠｜杉山▼屋島の誉｜岡村▼湖水乗切｜藤浪声水▼武田武士｜武田恒水▼彰義隊｜若林鶴山▼衣川｜加藤旭晃▼元寇｜原夏水▼夜の鶴｜小川野水▼吉野落(下)｜岡尾鶴城▼（来賓）須磨の浦風｜名古屋阿部秋子。

琵琶湖竹生島で琵琶献奏

六月十三日(日)昼、平経正を祭る竹生島の都久夫島神社で京都三美会（会長矢吹旭美津女史）の会長以下数氏が数曲を献奏して経正の霊を慰めた。

琵琶楽名流大会

六月十四日(土)昼東京茅場町証券会館ホール、主催日本琵琶楽協会。菅公｜斉藤▼伊豆の御難｜伊与田詩水▼大高源吾｜網野桜苑▼老蘇の森｜中村鶴翔▼青葉の笛｜箕浦旭声▼新撰組｜反町昇水▼小敦盛｜伊集院牙城▼西郷隆盛｜田村旭都▼扇の的｜吉永松陽▼城山｜吉田央舟▼羅生門｜押川旭葉▼横笛｜甲田勧水▼曲垣平九郎｜大場穂苑▼亀山上皇｜遠藤鶴東▼粟津の露｜藤巻旭鴻▼安達ケ原｜中村春水▼彰義隊｜平井春嶺▼大楠公｜原島旭粧▼恩讐の彼方へ｜高田栄水▼井伊大老｜西村旭一声▼噫八甲田山｜杉山旗水▼竪田落｜若宮旭登▼柳｜石井桑水。

錦心流琵琶演奏会

六月十五日(日)昼敦賀市気比公民館、一水会福井支部・港水会共催。月下の陣｜小柳▼柴田勝家｜河合▼城山｜玉木▼紅葉狩｜内田▼常陸丸｜小竹▼山科の別れ｜野村蟋水▼八甲田山の露｜松浦秋翠▼井伊大老｜松井兜水▼大楠公｜杉本和水▼新撰組｜村田知水▼村上喜剣｜会主岸本港水▼茨木｜西川磯水▼曲垣平九郎｜田中愛水▼坂崎出羽守｜田中篁水▼巌流島｜内田景水▼（以下特別出演）戻り橋｜名古屋阿部秋子▼石童丸｜栗京前田秋声。

ラヂオ琵琶放送

六月十二日(木)午後三時十分NHK・FM。「恵林寺炎上」水藤五郎氏。伴奏尺八三箇毘山氏。

転　居

山岡旭清女史　京都市左京区吉田牛の宮町24｜10（電話〇七五｜七五二｜九六六一番）に転居。

―（予　告）―

○：ものがたり琵琶杉山旗水演奏会　七月十二日(土)午後三時東京港区虎の門二丁目九｜一四発明会館ホール（有料）。劇団MOHAのほか都錦穂、鈴木流泉、座間鮫水、友吉鶴心、仲川旭朋、若宮旭登、原島旭粧、押田旭窈、山下晴楓、木原綾子、若水桜松、中谷襄水の各氏賛助出演。

○：京都琵琶協会七月例会　七月二十日(日)午後一時本部平井会長宅。

○：京都祇園八坂神社恒例演奏会　七月二十三日(水)午後四時｜七時半同神社能楽殿、京都琵琶協会協賛。

○：京都琵琶協会納涼懇親会　七月二十三日(水)午後八時京都四條大橋角東華菜館の鴨川床。（会費五千円。不足分は会から援助）

○：あさば琵琶楽（薩摩琵琶）　七月二十三日(水)午後八時伊豆修善寺温泉涵翠園あさば。番町皿屋敷｜杉山旗水▼茨木｜中谷襄水、外に希望者参加歓迎（一泊二食付一七、〇〇〇円）。

あとがき

梅が実のる頃に降るために梅雨という六月初旬に入梅宣言が行われ七月中旬まで降りすみ降らずみの鬱陶しい毎日に苦しめられ毎年のことながらホトホトうんざりする●やがて梅雨が明けると今度はしばらく厳しい炎暑と闘わねばならぬ●心頭を滅却し腹の底から大声を出して好きな琵琶の一曲でこれらを吹き飛ばそう。

〒569　昭和五十五年七月一日発行（非売品）
発編集者　植村　紘
行所　京　寞社
高槻市津之江北町一一｜一ノ二三
電話〇七二六（七三）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第三一三号　京絃社

五絃閑話（一〇）

水藤五郎

芸の魅力㈠

琵琶は、古来より語りものであると云う。勿論、琵琶は楽器であり、その楽器に合わせて語られる形式を取る関係から、自然歌の要素、則ち旋律歌唱的な面も加わって、一つの〝語りうた〟としての音楽となったと思われる。語り乍ら歌をうたい、ある内容を伝える目的を以って演ずるのであった。その内容は多岐にわたる場合と、平家なり、大平記なりの、ある限られた事実、人物等に的をしぼった場合とがあったのだが、そのいづれに於いても、語り手としての心、つまり、聴き手に内容を伝える心が要求されていたであろう。これは盲僧琵琶を演ずる人々、平家琵琶の演者等が共々に専門技芸家として、諸国を行脚して生活を営んでいたことからも察せられることである。

芸能生活者の条件として、第一に必要なのは、聴き手に理解しうる芸を供することに他ならないからである。

だが、琵琶の歴史に於いて、これが全てはなかった。つまり、朝廷の儀式や祭礼に於いて使われた雅楽の中での楽琵琶も、薩摩武士の間で愛好されて今日に至っている薩摩古曲も、その演ずる時の心は、聴き手を意識したものと云うよりは、自己に問いかける心と云うことが出来得よう。これ等の歴史的な推移等をここで詳しく述べることは出来ないが、芸能の長い歴史上、聴き手を意識する芸と、それ以上に自己への問いかける重点とする芸の共存は、琵琶のみでなく、他の芸能にもよく見られる現象の一つであると云える。

明治中期、永田錦心の出現は、薩摩琵琶のもつこの聴き手との断絶性を改革し、聴く者にとっての、楽しい琵琶を作り出した。これに依って、錦心流の全盛を生み、数多の人材を生み出したことはよく知られている。錦心と云う雅号が示す如く、これは演ずる心の改革であり、永田錦心の演奏の卓抜であったと以上に、この事は主張されなければならないと思う。

永田錦心の出現した明治期には、落語界に於いても、三遊亭円朝の改革があった。円朝はそれまでの落し噺しから脱却して、文芸作品としての価値を持つ落語を創作した。則ち、落語の内容を幅広いものにしたのである。これによって、落語界は明治期の新しい日々に対処して、聴き手の拡充に成功した。

円朝作品に見られるのと同様に、錦心作品の特徴として、意味づけされるものに典雅さがある。言葉を変えれば〝品の良さ〟である。

芸の位と云う表現があるが、それを例に取れば、高い位の芸であった。が、高い位の芸であり乍ら、多くの人々に親しめる平易さ、高遠におちいることのない位をも兼ね備えてもいた。芸の極地とは、大衆に訴える平易性と、その反面に、浄化された品位、何物にも動ずることのない普遍性とを併せ持った演技であり、作品であろう。

錦心流の全盛を招いたのは、他ならぬ錦心師の芸であり作品であったのだが、実際、その黄金期を支え、その芸風を伝播したのは、他ならぬ秀れた門人達であり、とりわけ名人として後に称せられた数名の人々であった。ある時期、師の錦心以上の人気をも集めたかに見えた榎本芝水を筆頭にして、錦心高弟が琵琶芸能者として、大衆の間に存在しえたのであった。

事実、その芸について考えてみると、単純素朴に見える錦心節調に比べて、高弟各氏の全てが高度で複雑な節調を持ち、華麗でもあった。このことは、三遊亭円朝以上にその高弟であった円喬、円蔵、円生等の話術が、高度で華麗であったことにも通じるのである。円朝亡き後、落語界に君臨した三遊亭円喬は古今無双の名人と云われていた。その驚くべき話術の芽ばえは、師の円朝をもしのぐものであったと云う。ところが、円喬の他にも、多くの門人を併出しながらも、円朝の名をつぐ者は現われなかった。未だに円朝の名を寄席看板に見ることはない。これと同様に、錦心の名をつぐ人は現われなかった。

この共通する流れは何故生まれたのであろうか。一言で云えば、円喬の話術は高位であって、落語の愛好者を上手で堪能させるものではあったが、円朝の如き、聴き手に訴えかける平易さに欠けるものがあったのである。これは、錦心高弟の人々が、その芸を高度にすればする程、錦心流を大衆から遠いものにしてしまう危険にも似ている。人は芸を高い境地にするべく努め、反面、高遠に陥いらぬ様にする努力をもしなければならない。

錦心の高位であり乍ら明快簡素である芸の境地は、今日の琵琶人の求めてもあきたらない目標でなければならないであろう。上は大臣から下は貧民に至る迄、広い階層に理解される芸として、琵琶を存在せしめた時、錦心師の心は蘇えることになる。（つづく）

建武の中興と吉野 五十七年（三）

ばくすい

六波羅勢は五月七日に全滅した。次ぎは鎌倉で、鎌倉を亡ぼすのは新田義貞である。

新田は源氏、八幡太郎義家の三男義国の長男義重が、上野の新田を領して新田家の祖となり、次男義康は下野の足利に住んで足利氏となった。新田は鎌倉に組せず、足利は北條と縁組したため新田はうとんぜられ、足利は重んぜられて、両家は兄弟でありながら不和となった。

新田義貞は大番に京都へ上っているうち、幕府の強制で金剛山の攻手大和方面に編入されたが、大塔宮から令旨を頂いて喜び、国に帰って準備を整へ、六波羅全滅の翌日五月八日に旗上げをして直ちに武蔵へ入り、十一日小手指原、十二日久米川に戦い、十五・六両日分倍河原の戦いに、高時の弟泰家の大軍を破って怒濤の進撃を続け鎌倉に迫った。鎌倉も死力をつくして之れを防ぎ、五月十八日から五日間昼夜の激闘が続いたが、二十一日深更、義貞みづから極楽寺口に向い、太刀を海中に投じて祈願した。すると、海水俄かに沖へ引き、稲村ケ崎二十余町が忽ち乾上ったので、義貞は直ちに鎌倉に討入り火をかけて攻撃したため、北條高時も力尽き東勝寺に入って自刃した、齢三十一才。一族之れに殉ずる者二百八十余人、自決者八百七十人。時に元弘三年五月二十二日。頼朝以来百五十年に亘り、天下兵馬の権を統べて万人を恐れしめた鎌倉幕府は遂に亡び去った。

これと前後して全国各地の幕府出先機関は、北国も九州も長門も、申し合わせたように亡んだ。然しそれを待つまでもなく、六波羅勢を駆逐して京都を取り戻したとの報告が来ると、五月十八日後醍醐帝は船上山を後に京都に帰還される。行列の先陣は伯耆守名和長年。赤松円心が兵庫に出迎えて、途中まで楠木正成は兵をひきいて粛然として奉迎する。正成は幕府を顛覆し、朝廷再興の第一功労者であった。幕府の軍勢を金剛山の周囲に釘付けにして、半歳の間これを悩ましし続けたればこそ、また正成が大塔宮の令旨を全国に伝達したればこそ、状勢は一変したのである。

やがて六月四日東寺を経て、翌五日後醍醐帝は宮中に還御。論功行賞により大塔宮は征夷大将軍、楠正成は河内・摂津・和泉三国の長官、名和長年は伯耆・因幡の両国、新田義貞は上野・越後・播磨、足利高氏は武蔵・下総・常陸、その弟直義は相模・遠江、北畠顯家は陸奥のそれぞれ長官となった。

この論功行賞の委員の両極端を主張したのは、楠正成と足利高氏であった。即ち正成は「戦死した肥後の菊池武時にも是非恩賞を。」

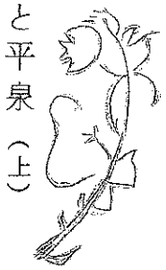
菊池武時は、蒙古襲来の時に奮戦して勇名をとどろかせた武房の孫で、元弘三年三月勅を奉じて挙兵し、幕府の九州探題北條英時を博多に攻めて、激戦の後戦死した正成には未知の英雄であるが、朝廷不遇の時率先して忠勤した功績は大きく、武時こそ功一級の忠臣であると私心なく主張した。

これに対して足利高氏は真向から反対した。元来、高氏は忠義の為に行動したのではない。足利の重臣今川貞世の書いたものによると、高氏の祖父家時は天下を取ろうと希望したが思うに任せず、自分の命を縮めて三代のうちに天下を取らせて下さいと祈願して自殺したとある。足利家は代々天下の武権を握らんとの野心を持ち、いま高氏の代に、鎌倉の勢力衰退を見て寝返りを打って官軍に加わったので、六波羅勢を京都から追い落とした後何をしたかを見れば判る。官軍が京都を取戻したのは五月七日で、その時問題は三ツあった。

一・鎌倉を討伐、二・後醍醐帝を京都に奉還、三・正成を敵の大軍包囲から救出。この三ツであったが、高氏はどれにも力を添えていない。一は新田義貞、二は名和長年、三は幕軍の崩壊によって自力で正成は城を出て帝を途中にお迎えしたのであって、その間高氏は京都に在って勝手に奉行所を置き、全国各地と連絡をとって武士の動きを登録し、実際上鎌倉幕府に代る者であるかのような印象を与えたのである。

篠村八幡宮で祈ったのは四月二十九日であるが、その前々日の二十七日に早くも全国に書状を送って連絡をとっている。二十七日は高氏と共に船上山を攻めた名越高家戦死の日であり、高氏が初めて官軍に加わった日である。即ち高氏は、元弘三年四月二十七日に寝返りをうって官軍に加わったように見せかけ実際にはその日から幕府を建てて、天下の武権を握る第一歩を踏み出したのである。

義経と平泉（上）



角田文衛

悲運の武将・源義経は、「活字本平家物語」「義経記」等の物語や琵琶歌によって国民的英雄に仕立てられ、判官びいきは、庶衆の間に行きわたっている。

しかしこの種の歴史物語の類は、視聴者の喝采を博すために幾多の虚構をあみ込み、ただでさえ不明な彼の実像を、ますますあいまいなものにしてしまった。

三十一歳で自らの命を絶った義経の生涯について、これまで確実に判明していたのは、『平治の乱』直後の永暦元年（一一六〇）の二月、母常盤の自首により二人の兄たちと共に嬰児牛若丸は清盛の保護を受け、常盤が大蔵卿藤原長成の後妻になってからは、長成の邸宅で兄たちと一諸に成長したが、平家を憚って兄らは早く寺に入れられ、やがて牛若丸も七歳のころ、出家を前提として鞍馬寺の稚児とされたこと、遮那王丸と呼び名を変えた義経は僧侶となることを嫌い、承安四年十六歳のころ鞍馬山を脱出し、金売り商人に連れられて平泉に赴き、秀衡の庇護を蒙ったことである。

治承三年から文治元年の六年間は、平氏追討に極まるように、彼が一生を通じて最も華華しく脚光を浴びた時機であったが、文治三年、窮鳥のように平泉に戻って秀衡の愛顧をえたころから、その消息は模糊となる。そして文治五年（一一八九）の閏四月三十日、泰衡が頼朝の激烈な恫喝に屈し、父秀衡の遺言にそむいて、前民部少輔藤原基成の衣川館に寄寓する義経と妻子、家人を急襲したことで彼の生涯は幕を閉じる。

史実としての義経の生涯はほぼ以上の通りで、史料によってそれ以上の追加、訂正は、ほとんど不可能と思われてきた。伝記も歴史家によって数冊公刊されているが、生涯の大綱に関しては、右の輪郭から出るものではなかった。

義経の伝記をもう少し明確にするためには、前記の基成と義経との関係に、新たに照明を投じてみる必要がある。『吾妻鏡』は基成を不当にも民部少輔と表記しているが、これまで歴史家は誰一人としてこの不当な表記に気づかず、この方面から研究に新生面をひらこ

うとは試みなかった。『吾妻鏡』を、白紙にかえって読み直してみたらどうであろうか。

確かに基成は民部少輔であった。しかし彼は、康治二年（一一四三）四月一日陸奥守に任じられ、六月には鎮守府将軍の兼任に補された。陸奥へ赴任する賞として従五位上に叙せられている。時に、二十四歳ほどの若さであった。

基成は、長男の隆実だけを都に残し、一家を挙げて陸奥国に赴任した。基成の時分の陸奥守兼鎮守府将軍は、前任者の藤原師綱の後を受けて相当な権威を保持しており、平家政権もこれをないがしろには出来なかった。

基成の在任は、康治二年から仁平三年（一一五三）まで十年余にも及んだ。彼は平泉の康衡には協調政策をもって接し、基衡の嗣子の秀衡には自分の娘を正妻として納（い）れた。恐らく彼は、職権を利用してかなりの荘園なども獲得していたことであろう。

熊野御前

矢部峯水
柿沢篁峰　合作

治承四年三月花の頃
遠津近江の池田より　熊野と名づくる美女一人
久しく都にとどめおくその母病篤ければ
度々人を遣わせて　熊野のいとまを乞わせしが
さても平の宗盛は
宗盛これを聴き入れず今日も今日とて清水に
花見の宴催おさんと　熊野を伴ない
牛飼い車同車にて　四條五條の橋の上
老若男女貴賤都鄙　袖を連れて行く末の
雲かと見えて八重一重咲く九重の花盛り
名に負う春の景色かな熊野は道々車より
御堂や寺に手を合せせん堤救世の御方便
護らせ給え母上よと　心をこめて祈りけり
清水寺に着きたれば　御堂に籠りひたすらに
念誦するほか余念なしやがて花見の御酒もり
とくとく出でよと促さる　音羽嵐の花の雪
深き情を人や知る　熊野は心を励まして
お酌に立ちて清水の　曲舞い謡い舞を舞う
折しも一天俄かにかき曇り　神竜怒って風を呼び
村雨矢の如く襲い来る　花見桜の静けさは
花の乱舞の吹雪となる　寄せ来る嵐に砂塵は
花をさらって天に昇る　並み居る人々それぞれに
右往左往と逃げまどうやおら嵐もおさまりしが
無残に花は散りにけりあら心なの村雨や
春雨の　降るは涙か桜花
散るを惜しまぬ人やある熊野は感にぞ堪えかねて
一首の歌を宗盛に　涙を押さえ捧げけり
いかにせん都の花も散るらん　惜しけれど
なれし東の花や散るらん
ここに宗盛漸くに　熊野を留めおくの非を悟り
心に悔いて暇を与え　多勢の供人つきそわせ
藤の名木と豪華絢爛の裳衣の調度を与え
見送り給う花のもと　げに観世音の御利生は
親孝行の真心に　現じ給うぞ有難き
現じ給うぞ有難き」

来たる八月一日完行の本紙は例年の通り夏季特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて暑中交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

夏季特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京紘援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え七月十日迄に御申込み願います。

織田信長築城の安土城

辻　旭城

現在の江州安土山麓は、金色の稲穂の実のる美田と化しているが、安土城の築かれた当時の安土山は、琵琶湖最大の内湖「中の湖」に突き出し、三方を湖に囲まれていた。安土城を考えるとき、三方が湖水であったという事実を見逃がしてはならない。単に要塞堅固というだけではなく、急を要するときは、天守閣の下の船どまりから早船で湖上を坂本や朝妻に行けば、陸路で一日以上を要する京都や岐阜へ、半日余りで行くことが可能であった。

当時安土から京都へ行く場合は、瀬田で一泊して翌日京へ入るのが一般的であった。信長は多くの場合その日のうちに入洛したが、これは少人数で馬などを使用して始めて可能となるもので、強行軍といってもよい。しかし水運を利用して船で坂本まで行き、そこから山中越（やまなかごえ）で京都へ入れば、半日ほどで行くことが可能であった。それだけではなく、湖を利用すれば陸路の何分の一かの時間で、陸路の何倍もの兵糧や兵員を輸送することが出来る、しかも湖上は陸路の如く、決まった一本の道に束縛されるわけではなく、目的地や気象条件に応じて、如何なる航路も可能な〝無限の道〟である。

安土の夏は、京都などにくらべて湖岸に近いのと緯度が高いためか朝夕は勿論、日中でも比較的過ごしやすい。梅雨明けを告げる雷鳴は観音山にとどろく七月十四日、出雲神社と石部神社の夏祭りが行われる。この祭りは、遠く安土の西麓に鎮座する石部神社から始まり、また出雲神社の周辺に氏子たるべき人家が無かったので、安土築城のときに両村を移転したものと伝えられている。安土城築城以前の安土山は、この二社を除き不明である。

現在東海道本線のすぐ南の家並みのはづれ、安土町慈恩寺に浄厳院がある。毎年十一月二日から五日まで、浄厳院年中行事のうちでも最も盛大な〝秋季法要〟が営まれ、大阪琵琶同好会がこれに協賛して献奏することになっている。

寺は織田信長が、六角氏の菩提寺慈恩寺を破壊したあとに、近江と伊賀の浄土宗総本山として再興した寺で、天正七年（一五七九）の安土宗論の場として知られている。腰が高く軽快な切妻造りの楼門、近江八幡から移された正面七間、側面六間の本瓦葺、室町末期の大本堂、釈迦堂、鐘楼などが作られている。本尊は寄木造り、丈六の阿弥陀像である。像高八センチ足らずの鎌倉時代の銀製阿弥陀像なども伝っている。

法要には戦前には何軒もの露店が並び、境内一ぱいに参拝者が充ちたというが、今は淋しくなってきた。

松茸の季節が終るころ、安土には早くも初冬の気配が色濃く漂って来る。そして十一月の下旬には必ずといってよいほど初雪に見舞われる。

剣も強いが絵筆も凄い
宮本武蔵

武宮精作

生涯を放浪のうちに過ごし、十三歳で新当流の武芸者有馬喜兵衛を倒して以来、六十余たびの真剣勝負に一度もひけをとらなかったという、稀代の剣豪宮本武蔵（一五八四―一六四五）！小説や映画に描かれた、あまりにも厳しいその生き方に、人生の意味を深く考えさせられる。

古今未曽有の剣法者であった武蔵は、また詩歌や茶の湯、碁将棋などの諸芸にも秀でていたという。とりわけ絵画にかけては、若くして宋元画を学び、晩年は水墨画をよくし、〝二天〟の号は巨匠長谷川等伯などと並び称せられるほどで、終生の道であった「剣」以上の境地に達していたとも云われる。

よく知られている吉岡一門や、佐々木小次郎との決闘に見られるように、生と死を紙一重の差でくぐり抜けてきた日の体験が、武蔵の描く絵にきわだった魂の鮮烈さを与えていると云われる。

武士が描いた作品で、名作傑作と評せられるものは少なくないが、キリリと張りつめた精神の緊張、厳しさの点で、武蔵の作品に匹敵するものはない。同じ武士と云っても、実際に人を斬ったことのない者と、凄惨なまでに人を斬り続け、ついには「道において死をいとはず」「仏神は尊み、仏神を頼まず」と思い定めた武蔵との、気迫の差とでも云えようか。

武士の芸術の最高峰といわれる武蔵の絵が、このほど熊本市の財団法人島田美術館などの協力で、武蔵の作品二点が原画と見まちがうほどの見事な複製掛軸に再現された。ひとつは武蔵晩年の自画像。白い着物に朱の袖なし羽織を着て、大小二刀を無造作に構え、眼光炯々としたすさまじい面持ちで立つ宮本武蔵。ぼうぼうの髪、抜け上った額（ひたい）、が

っちりした体軀…。なるほど武蔵はこんな人物だったのかと、感じ入らせずにはおかない強烈さがみなぎる。

もう一点は、武蔵の代表作品であるだけでなく、花鳥画の白眉としてあまりにも名高い枯木鳴鵙図（こぼくめいげきず）。枯木にとまった一羽のモズ。小鳥や小動物を捕えて引き裂く猛鳥の本性を、その烈しい眼の中にみなぎらせている。模様風の奇麗ごとや柔弱の気はいささかもなく、張りつめた気迫が観る者に強い印象を与える。

二刀流の切れ味・気迫ほとばしる絵!!。剣にも絵にも武蔵の豪快さがしのばれる。

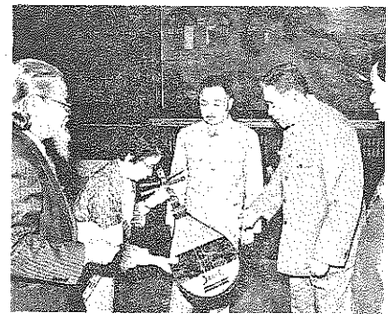
山崎旭萃叙勲祝賀会

筑前琵琶日本橘会・山崎旭萃会本部・光橡会本部・日本琵琶楽協会関西支部・日本伝統芸能集団の五団体発起で、このたび勲五等瑞宝章受賞の栄に浴された首記が六月七日(土)午後一時大阪駅前の新阪急ホテル二階大広間で盛大に開催され、琵琶関係を主とした百二十五名が主旨に賛同して出席した。まづ定刻大阪NHKの笹谷女性アナウンサーの司会で開始、正面壇上に「祝山崎旭萃叙勲祝賀会」の大きい横書が人目を引き、金屏風を背景にした舞台に山崎旭萃宗範を壇上に迎えて、橘会家元橘旭宗氏、大阪NHK文化部長をはじめ数氏が祝詞を述べて記念品を贈り、お孫さんほか二、三の花束贈呈のあと山崎女史から答詞の挨拶があり、引続き豪華な洋食や寿司、そば、おでんなどの屋台店も一角に設けられて一同立食の饗応を受けながら山崎女史の功蹟、栄誉を讃えビールで乾盃して三時目出たく閉会。尚当日山崎宗範から出席者各自に美事な記念品が渡された。

矢吹、田中両氏の中国親善旅行

京都市埋蔵文化財研究所田辺調査部長を団長とする一行九十二名に加わった京都の矢吹旭美津、田中鵬水両氏は、中国から差廻しの飛行機で、五月九日から一週間にわたり中国各地を歴訪して友好をあたためたが、この内十名の代表が京都市と友好都市の西安人民政府庁を表敬訪問し、席上矢吹、田中両氏が琵琶「蓬萊山」を演奏して、日本の琵琶というものに対し認識を新たにして喜ばれたあと、筑前琵琶楽器一面を寄贈して永く同庁に保存されることとなった。

一行は西安市のほか北京、上海などを訪ね、また万里の長城その他を見学して日中親善旅行を終り五月十五日恙なく帰京した。（写真は京都新聞から転載。）



各流派琵琶合同演奏会感想記

五月二十五日(日)、京都商工会議所ホールでの各流派琵琶合同演奏会は、雨を冒しての聴衆者二〇〇余名にも達し、たいへんな盛会であった。

十一時開演。

来賓名古屋の錦心流女流、松浦秋翠女史、安倍秋子師の演奏は、まさに当地に新しい息吹きを吹き込んで頂き、聴衆に深い感動を与

えて下さった。

なおまた東京前田秋声先生の特別演奏を冀い、美しい琵琶の音が耳に深く刻まれて終演が飾られた。

会場は華やかな中に静寂さがあり、金屏風赤毛せんの舞台、大生花、両側のスタンドのライトに照らされ、マイクも好調、美しい椅子席は長時間の着席に適わしい。

会員たちの演奏はいづれも用意周到、力一ぱいの熱演に熱演が続けられて、聴衆に満足が与えられた。

五時、地下のレストランで和やかな祝宴が開かれて、六時半解散す。開係者三十余名。

追　伸（自己反省）

1. 自分の個性に合った曲目を選定すべきか。曲目によって弾奏品格を高めることも可能である。
2. 聴き手に歌詞、内容がはっきり分かり、情景がほうふつと浮かぶように発声す。
3. 弾法は間奏である。歌とよくマッチすべきで、内容に適った手を引く。内容と離れて弾法ありの感あり。
4. 曲が立体的に表現出来たか。平板な進行に終ったか。
5. 独創的な歌い方を加味してはいかが。
6. 松尾芭蕉が弟子の森川許六に与えた一文の一節に「猶、古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよと弘法大師の筆の道に見えたり。」と。

（五五・五・三一　鴨水記）

総本山大念仏寺（大阪）琵琶献奏

五月五日(木)昼大阪琵琶同好会協賛。城山｜森野▽敦盛｜入江▽菅公｜朽木▽菊水の旗｜島津▽赤垣源蔵｜米原▽伏見の吹雪｜豊島▽湖水渡り｜多和▽五條の橋｜辻旭城▽石童丸｜作花旭友▽吉野懐古｜野々村旭山▽妻の片袖｜石橋旭嶺▽衣川｜天津八千代。外に詩吟、剣舞など数番。

日本芸術琵琶普絃会五月例会

五月十八日(日)昼東京文京区大塚六丁目の席貸京屋で開催。お江戸日本橋・門琵琶・伴流謡切第七弾法の連弾｜錦幽▽城山｜内田隆章▽河中島｜松本蕾水▽石童丸｜鈴木好水▽坂崎出羽守｜伴旭友▽俊寛(下)｜坂入晴峰▽坂崎出羽寺｜青木早水▽忠度都落｜高田栄水▽娘みゆき｜金森旭弾▽竜の口｜日比錦姫▽義経弓流し｜山本隆水▽渡守甚兵衛｜西村錦鳳▽会津の華｜杉山旗水。このあと宗編流の茶入日比稲子女史による点前の饗応を受け小宴の後六時半散会した。

各流派合同演奏会

五月二十五日(日)午前十一時京都商工会議所ホール、京都琵琶協会・一水会京都支部・薩摩琵琶四明会共催。朝来生憎の雨で心配したが予想外に多くの聴衆を迎え広い会場も満員の盛況を呈して左の通り演奏が続き万雷の拍手が堂を動がせた。なお入洛中の錦心流大家前田秋声氏に乞うて番外出演を願い有終の美を飾ったが病気や突発事故のため二、三の欠演者があったのは残念であった。

終演後関係者数十名が地下のレストランで祝宴を開いて乾盃、六時半目出度く散会した。

城山｜近藤高静▽水天門｜山田明嶺▽未練西行｜林旭萠▽竜の口｜水内嶺水▽曲垣平九郎｜桜井旭冨▽細川ガラシャ夫人｜山本嶺舟▽小栗栖｜木下皇水▽茨木｜田中歌水▽会津の稚児桜｜（来賓）松浦秋翠▽関ヶ原｜山岡旭清▽羅生門｜牧南水▽熊野御前｜柿沢篁峰▽井伊大老｜林田旭城▽湖水渡り｜平井春嶺▽那須与市｜荒木旭嶺▽戻り橋｜（来賓）阿部秀子▽坂崎出羽守｜梅原旭濤▽川中島｜馬場鴨水▽花紅葉｜（来賓）前田秋声。

第二十回筑前琵琶紅会演奏会

六月一日(日)昼東京日本橋三越劇場、会主押田旭窈女史、司会NHK鈴木健二氏。会歌くれない｜会員一同▽湖水渡り｜薄雅子・絃旭凰▽五條橋｜伏見旭緑、浜野旭愛、宇野旭昌▽安宅の関｜岡田旭蓮、福田旭盛、春日旭芳・絃旭粧、旭典▽那須与市｜藤田旭須美▽坂崎出羽守｜石井旭良▽本能寺｜三上旭凰▽詩吟近江八景｜坂本松良▽耳なし芳一｜木原綾子▽大物の浦｜若宮旭登▽天の語歌｜旭凰、旭須美、旭良・琴富中冨美和▽小栗栖｜小笠原旭星・絃旭窈▽九月一日噫々焦土｜宮武旭豊▽川中島｜須田誠舟▽戻り橋｜原旭潮、原田旭柳・絃吾妻江風▽若き敦盛｜仲川旭朋・絃旭窈▽土屋主税｜原島旭粧▽戦艦大和｜若水桜松▽花紅葉｜前田秋声▽平泉懐古｜会主押田旭窈▽橘式三番叟｜旭粧、旭潮、旭星、旭豊・絃旭窈、旭柳、旭朋、旭凰、旭良、旭須美・立方藤間芙紗、鈴木三砂子・お嘶子玉藻会。

遠参琵琶弾交懇親会

六月一日(日)昼静岡県浜名湖厚生会館、当番薩摩琵琶鶴絃会。（一水会豊橋支部）大楠公｜小川清水▽木村重成｜山本宝水▽新撰組｜小林典水▽戦艦大和｜石黒石水▽湖水乗切｜吉見輝水▽天目山｜菅沼穣水▽毒饅頭｜神藤